思いや意図を表現する生徒が育つ音楽科の授業

Ⅰ はじめに

近年は，グローバル化の進展によって，国境を越えたつながりが一層加速している。これからは様々な価値観をもった人々同士が，個々の感性を働かせながら他者と協働していくことが期待されている。音や音楽に対する感じ方は，人によって多様であり，創意工夫することで多様な音楽表現ができる。そこで音楽科では，個々が感性を働かせ，他者と協働しながら音楽表現したり，音楽のよさや美しさを共有したりすることが，音や音楽，音楽文化と主体的に関わり，心豊かな生活を営むことにつながると考えた。

また，中学校音楽科の学習指導要領において，「思考力・判断力・表現力」の育成に関する目標に「音楽表現を創意工夫することや，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする」[注1)]とある。そのような活動を通して，知識・技能を習得することが重視されるようになってきた。

以上のことから，本校音楽科では，思いや意図をもち，音楽表現を創意工夫していく活動を協働的に行うことで必要とされる知識・技能を習得し，より主体的・創造的に活動できるようにしていくことが，学習指導要領改訂の基本的な考え方である「生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成につながると考えた。

前研究では，「創意工夫してよりよい表現をすることができる子ども」を研究主題とし，音楽表現について考え，繰り返し練習に取り組ませることで，表現意図を表すことができるようになると考え実践に取り組んできた。その結果，「試行錯誤するポイント」[注1)] を基に練習を重ねようとする姿が多く見られるようになってきた。また，音楽を形づくっている要素と要素同士の関連について知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながらよりよい音楽表現を追究することができるようになってきた。しかし，楽曲分析で掴んだことを，「『表現のめあて』[注2)] の決定」や音楽表現に十分にいかすことができない姿も見られた。これは，自分の考えに固執し，他者の考えを取り入れようとせず，音楽表現を創意工夫することについて多様に考えられなかったことが原因であると考える。

そこで，本研究では，引き続き音楽的な見方・考え方を働かせ実感を伴わせるとともに，拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を位置づけ，メタ認知を促進することで「表現のめあて」をどのように決定していくとよいのかを明らかにし，必要な知識・技能を習得して思いや意図を表現することができるような手立てを探っていく。

以上のことから，研究主題を「思いや意図を表現する生徒が育つ音楽科の授業」と設定した。

Ⅱ 研究の概要

１　音楽科の目指す生徒像

思いや意図を表現する生徒

「思いや意図を表現する」とは，「自分がどのような音楽表現をしていきたいのかという思いや

意図をもち，音楽表現をすること」である。思いや意図を表現するには，曲想を感じ取ったり，音や音楽に対するイメージを膨らませたりすることで，多様な音楽に対する解釈や理解を深め，音楽を形作っている要素の働かせ方を試行錯誤し，音楽表現を創意工夫することが大切である。

２　育みたい資質・能力

音楽科における目指す生徒像に近づけるために，以下のような資質・能力を育む必要があると考えた。

『表現のめあて』を決定する力

「『表現のめあて』を決定する力」とは，思いや意図を，音楽の要素をどのように働かせて音楽表現するのかについて，創意工夫する過程で知識・技能を得たり生かしたりしながら決定する力を指す。

この資質・能力を育んでいくことで，生徒たちは，音楽科が目指す生徒像に近づくことができると考える。

３　資質・能力を育むための手立て

題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し，授業を進める。そして，拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を位置づけることやメタ認知を促進させることで，思いや意図を表すことのできる『表現のめあて』を明確化させていく。

「つかむ場」は，「つくる場」の教材にいかすための楽曲分析と，現時点で考える『表現のめあて』を設定する場である。楽曲分析では，「つくる場」の教材にいかすことのできる楽曲を用いて「試行錯誤するポイント」となる音楽の要素とそれらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気と曲想との関わりについてつかませていく。始めに，教師が本題材における課題を提示し，それを達成するための音楽の要素となる「試行錯誤するポイント」を伝えたり，作曲者の意図や楽曲の背景を知らせたりすることで，焦点を絞って楽曲分析を行わせる。それらを全体で共有した後，鑑賞文を書かせることで，曲想と音楽を形づくっている要素との関わりをつかませていく。最後に，『表現のめあて』を設定させる。その際，「試行錯誤するポイント」が生かされた『表現のめあて』になるように促し，『表現のめあて』を設定させていく（「拡散的思考中のモニタリング」以下「拡M①」）。

「つくる場」は，「試行錯誤するポイント」を基に，試行錯誤しながら，思いや意図を実現するための「表現のめあて」を決定し，音楽表現をする場である。始めに，「つかむ場」で設定した「表現のめあて」について，グループや全体で意見交換させる。次に，「試行錯誤するポイント」をどのように働かせれば，思いや意図を表現できるのかについて，個人やグループで試行錯誤しながら，音楽表現を工夫し，「表現のめあて」を再設定させていく。そして，ペアやグループで鑑賞し合う機会を設け，その際に拡散的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として，「試行錯誤するポイント」がいかされた音楽表現であるか，他の音楽表現はないかどうか問い掛け，意見交換させる（「拡散的思考中のモニタリング」以下「拡M②」）。

収束的思考を働かせる場面として，「試行錯誤するポイント」を基に，ペアやグループの意見交換で伝えられたアドバイスと自分の考えを比較させる。その際に収束的思考を適切に働かせるためのメタ認知の促進として，伝えられたアドバイスと自分の考えを比較しながら「表現のめあて」を見直させる。また，ＩＣＴ機器を活用し録音や録画した演奏を客観的に振り返らせることで，「試行錯誤するポイント」がいかされているか吟味させ，「表現のめあて」を決定させてい

く（「収束的思考中のモニタリング」以下「収M」）。

「ふりかえる場」は，自他の演奏を通して「試行錯誤するポイント」を「表現のめあて」の決定にどのようにいかし，音楽表現を創意工夫することができたのかを振り返らせ，それが他のどのような場面でいかすことができそうであるかについて，ワークシートに記述させる。また，拡散的思考と収束的思考を働かせる場面について，『表現のめあて』の決定にどのような効果があったかについてもワークシートで振り返らせる（「拡散・収束的思考による課題解決後のリフレクション・モニタリング」以下「拡・収ＲＭ」）。そうすることで，深い理解を伴った知識・技能（音楽を形作っている要素とその働きについて実感を伴いながら理解し，表現に生かせるようにすること）を習得させることができると考える。

場	つかむ場	つくる場		ふりかえる場
活動	楽曲分析 『表現のめあて』設定	『表現のめあて』再設定	『表現のめあて』決定	まとめ
思考	拡散的思考		収束的思考	
メタ認知	「拡M①」	「拡M②」	「収M」	「拡・収ＲＭ」

【題材の主な流れ】

４　資質・能力が育まれたかの評価について

「『表現のめあて』を決定する力」については，学習プリントの記述内容から見取る。

５　これまでの成果と課題

１年次は，楽曲分析でつかんだことをいかし『表現のめあて』を設定して表現させるために，題材を「つかむ場」「ためす場」「つくる場」の三つの場に分け「拡散的思考」「収束的思考」を働かせる場面を設定した。このことについて，楽曲分析では，楽曲から感じ取った曲想と音楽を形づくっている要素と要素同士の関連について結び付けることのできた記述が増え，鑑賞文においては，自分の言葉で楽曲の説明をしたり，楽曲のよさを伝えたりする姿が見られるようになってきた。また，『表現のめあて』においては，表したい音楽表現について思いや意図を記述することができるようになってきた。しかし，創意工夫するために必要である技能について考えることができない『表現のめあて』を設定する生徒もおり，思いや意図を音楽表現において十分に生かすことができていなかった。

２年次は，場の設定を見直し，「つくる場」で試行錯誤させながら活動をすることで音楽表現において思いや意図が十分に表現できるようになることをねらいとし，題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場に分けて活動をさせた。こうすることで，参考曲や鑑賞曲から学んだことを音楽表現で試しながら，音楽の要素の働きと曲想の関連について実感を伴いながら音楽表現する姿が多く見られた。

「つくる場」においては，「つかむ場」で学んだことを基に，ペアやグループで音楽表現の仕方について試行錯誤する場面を設定した。そして自身の「表現のめあて」を達成するための音楽表現の仕方について，互いに鑑賞し，「試行錯誤するポイント」を基準に意見交換をさせ，拡散的思考が働くようにした。さらに伝えられたアドバイスと自分の考えを比較しながら活動を進めることで，収束的思考が働くようにした。その結果，『表現のめあて』を修正しながら，より思いや意図が表れる音楽表現について見つけようとする姿が見られた。

「ふりかえる場」においては，リフレクション・モニタリングとして，題材を通して学んだこと

をワークシートに記述する活動を行わせた。このことについて，題材を通して身に付いた音楽的な知識について客観的に把握することができた。

しかし，生徒たち自身で最適な解決方法を見つけることができていない課題が残った。その理由は，試行錯誤するポイントが多くあったため，焦点化できず，「拡散的・収束的思考」を適切に働かせられなかったためだと考える。また，生徒が，「拡散・収束的思考」の有効性に気付いていないことも原因であると考えられる。

３年次では，「試行錯誤するポイント」を精選し，単元を構成した。その結果，楽曲分析から「『表現のめあて』の決定」に至るまでの過程において，思考を焦点化できたことで「試行錯誤するポイント」をより意識して考察する姿が見られた。さらに，「つくる場」の意見交流の場においても，「試行錯誤するポイント」を踏まえた意見交流がなされ，それらの意見を踏まえて自身の『表現のめあて』を見直し，よりよい音楽表現について創意工夫する姿が見られるようになった。これらのことから，「拡散的・収束的思考」を適切に働かせることができたと考える。

「ふりかえる場」においては，リフレクション・モニタリングとして，「『表現のめあて』の決定」に至るまでの過程についてワークシートで振り返らせた。生徒の記述を見ると，「友達の演奏を聴いて，よりよい表現の仕方を見つけることができた」や，「客観的に自分の演奏を振り返ったことで課題がはっきりした」等といった記述が見られ，「拡散的・収束的思考」の有効性を認識している様子が伺えた。

Ⅲ おわりに

前研究シリーズにおいて，音楽表現の創意工夫について多様に考えさせられなかったことが課題として残ったことから、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を位置づけ，実践に取り組んだ。その結果，「試行錯誤するポイント」を手掛かりに楽曲分析したことを基に，『表現のめあて』を何度も設定しながら，音楽表現を創意工夫する姿が見られるようになった。また，ＩＣＴ機器を活用することで自身の演奏を振り返ったり、他者の演奏やアドバイスを生かしたりしながら，音楽表現について多様に考え，模索する姿も見られるようになった。

以上のことから，拡散的思考と収束的思考を働かせ，「表現のめあて」を決定させていくことで，「思いや意図を表現する生徒」の育成に迫ることができたと考える。今後も，「思いや意図を表現する生徒」の育成を目指し，さらに研究を進めていきたい。

注１）　教師が示す，単元のねらいに応じて指導したい「音楽を形づくっている要素」を基としたポイント。

注２）　自己の思いや意図と，それを実現させるための表現の仕方（音楽の要素の働かせ方や奏法）について文章で書き表したものを指す。

注３）　音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化なとど関連付けること。

引用文献

1)　文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年６月）解説－音楽編－』教育芸術社，2017年

参考文献

副島和久『新学習指導要領の展開　音楽編』明治図書，2017年
久保田慶一『2018年問題とこれからの音楽教育　波動の転換期をどう乗り越えるか？』ヤマハミュージックメディア，2017年

小山英恵『フリッツ・イェーデの音楽教育－「生」と音楽の結びつくところ』京都大学学術出版会，2014年
齋藤寛『心を動かす音の心理学　行動を支配する音楽の力』ヤマハミュージックメディア，2011年
須藤貢明・杵鞭広美『音楽表現の科学　認知心理学からのアプローチ』アルテスパブリッシング，2010年